

る。さらに努力すればそれが顕著になる。さらに努力すれば欲などの惑いが取れる。さらに努力すれば惑いに阻害されなくなる。さらに努力すれば凡心から聖(きよ)い心に変わる。さらに努力すれば物など相手と我との隔たりがなくなり一体化する。そうなれば聖人の域に達するのである」。この章は、凡人でも努力次第で聖人の高い境地に達することを藤樹先生が説明しておられます。

では、凡人はどういう努力をすればよいのでしょうか。そこで「致知今年二月号」の「東洋教学が導いてくれた世界」を配りました。その中でリンカーンの「志あるところに道は開く」という言葉、渋沢栄一の「自分は『論語』だけで経営をやってきました」との言葉などを紹介しました。すなわち、自分はこういう方向で社会に貢献するという大きな志を持って努力することだと思えます。

参加者からは「いびつな経済と健全な経済をしっかり認識して健全な経済のために今日学んだことを生かしていきたい」、「他人のことを我がことのように考える人がいるのは凄い」、「フリートーカーキングでの皆の意見がとても参考になる」等の意見、感想をいただきました。

私からは「利益が上がらないと幸福になり難いが、利益を多く得たからといって幸福になるわけではない。他の幸福を願う心や徳を積んで

はじめて幸福になると思う」と述べました。

人間学に関心のある方は是非お越しください。心からお待ちしています。

### 藤樹人間学塾 今後の予定

六月五日(土)、七月三日(土)

八月八日(日)、九月十八日(土)

■日時 (原則) 十五時〜十七時

■場所 (原則) 安曇川公民館

### 「藤樹紙芝居」の紹介⑱

「藤樹紙芝居」の紹介も、今回は最終となりました。特に、今の若い人たちに是非目を通していただきたい作品です。

#### 『脱藩の道』

(解説)

与右衛門さん(藤樹先生)は、数え年九歳で小川村から祖父に伴い、米子、大洲に行き、侍の子として育てられました。しかし、十四歳の時、祖母を、その翌年には祖父を相次いで亡くしました。三年後の十八歳の時には、ふるさとの父吉次の死を知られました。父とは、小川村を出て以来、一度も会うことなく、永遠の別れをしたのです。

自身の悲しさはさておき、心を痛めたのは、母のことでした。頼りにしていた夫を亡くし、寂しく暮らす

母が心配でした。

そこで、小川村に帰って母を養おうと考えて、藩主に辞職を申し出ましたが、与右衛門さんの人徳、学徳を惜しむあまり、数年が過ぎてもお許しが出ませんでした。与右衛門さんは、悩み苦しむ中で、ついに死罪を覚悟して脱藩を決断、実行しました。与右衛門さんの意志の強さ、母を思う一途さに心打たれる実話です。

与右衛門さんの生き方に関する話として、多くの人々に語り継ぎたいと考えて制作しました。藤樹先生の講話として、また道徳の時間の資料(家族愛)として、活用していただくことを願っています。

▼参考文献

・児童用副読本『藤樹先生』

(編集・発行)高島市教育委員会

#### (紙芝居)

① 与右衛門さんが十八歳の時、小



川村のお父さんが亡くなりまし  
た。九歳で米子へ旅立った時から、一度も会うことなく、父を亡くしたのです。

与右衛門「おばあさん、おじいさんに続いて、お父さんも亡くなられた。一度でいいから会いかけた。

お父さんと力を合わせて家を守ってこられたお母さんは、心細くしておられることだろう。お母さんのことが心配だ。小川村に帰りた

い。」



さんの墓参りにも行けない忙しさでした。

そして、お父さんを亡くしてから、四年の月日がたち

ました。ようやく殿様

のお許しが出て小川村のお父さんのお墓参りと、さびしく暮らすお母さんに会うため、ふるさとに帰ることができました。

与右衛門「なつかしいわが家だ。あ

あ、垣根がいたんでいるな。植木もよくのびているな。お母さんは困っておられるのだ。心配していたとおりだ。」

父を亡くしたわが家は、荒れ果てていました。お父さんの墓は、屋敷の中にありました。(その当時は、家の庭にお墓をたてました。)お墓